第9章

スポーツとエスニシティ
——ビジネスとしてのサッカー協会「経営」：インド系フィジー人——

はじめに

フィジーはスポーツの盛んな国である。広場があれば必ずラグビーかサッカーのゲームが行われ，首都スヴァ市のナショナル・スタジアムの各施設ではバスケットボール，ホッケー，ネットボールが毎日行われている。またテニスコートでもあらゆる民族の男女が楽しんでいる姿を見かける。フィジーは1970年まで英国の植民地体制下にあり，スポーツ界も政治や経済と同様，植民地の大きな影響を受けている。現在の大衆的スポーツはすべて植民地時代に導入されたものであり，また今日最大の政治課題である民族問題の根源も，契約労働者としてフィジーにインド人を移民させた英国の植民地政策にある。フィジーに永住したインド系住民と先住のフィジー系住民とは文化的な違いだけでなく，スポーツの好みも異なっている。植民地当初フィジー系住民はクリケットを盛んに行ったが，最近では格闘技的要素の強いラグビーを好み，インド系住民は身体接触が比較的少なく攻守の切り替えの早いサッカーを好む傾向がみられる。また競技団体の運営にも民族性の違いが大きく反映されている。

1970年の独立以後両民族の調和の下で政治的・経済的に南太平洋島嶼諸国のリーダー的役割を果たしてきたフィジーであるが，87年の総選挙以後民族

対立が顕在化した。独立後はフィジー系住民と一部のインド系住民が支持する同盟党が政権を握り，フィジー系住民が政治を，インド系住民が経済を分担するという区分けが成立し，政情は比較的安定していた。しかし1987年の選挙の結果，インド系住民が支持する国民連邦党と両民族の都市労働者が支持する労働党（1985年結成）との連立政府が誕生した。インド系住民を代表する政府ができたことで，先住のフィジー系住民は新政府が土地売買禁止の法を改正し，インド系住民が経済力を恃みに土地を買い取り，フィジーを我がものにするのではないかと危惧した。そこでフィジー系住民よりなる軍隊が，フィジー系住民の暴発を未然に防ぐという口実の下にクーデターを起こし，閣僚を拘束し新政府を倒した。このクーデターは，労働党主導の政権に反対する従来のフィジー系首長主導の同盟党を支持する勢力によって起こされ，労働党対同盟党という新たな階級的対立構造を，インド系政権対フィジー系住民という旧来の民族対立の構造に戻した。1990年の新共和国憲法下ではインド系住民を第2クラスの市民として位置づけ，奨学金などの機会を減少し，インド系議員の議席数は従来のまま27議席だが，フィジー系を37議席とし，フィジー系住民の至上権を10議席のハンディで確保しようとした。1992年に行われた選挙ではフィジー人党（SVT, 旧同盟党）はフィジー系の37議席すべてをとることができなかった。結局は旧同盟党内の分裂に乗じて労働党がキャスティング・ボートを握ることになった。その結果，首長勢力が予定していた首相候補ではなく，労働党からの新憲法の見直しの要請を考慮に入れることを条件にした，クーデターの指導者ラムブカ少将(SVT)が首相に指名された。先住のフィジー系住民とインド人移民の子孫であるインド系住民とのこの対立は，植民地を経験した国が抱える典型的な民族問題のひとつである。

植民地体制を経験した民族にとって，スポーツが自己を表現し，その勝利が民族的自信を獲得する画期的な契機になっている例が少なくない。オーストラリアでは本国英国にクリケットで勝利したことを契機に，自らを身体的・道徳的に劣る罪人の子孫であると規定していた劣等感から解放され，ナショナリズム形成が促された（ジャキュース&パビア［1983], pp.74-75)。また

▲ベンソン・ヘッジ・トロフィーを獲得したナンディ・チーム（ラグビー）

ブラジルでは，1950年にサッカーのワールドカップ最終戦でウルグアイに敗北したが，この敗北は約束された偉大な新生国家にとって歴史的な機会を逃したという認識で，全ブラジル国民を結び付け一体化させた。これは不運な人種構成，インディアンと黒人という人間集団からなる重いお荷物を背負った社会が，当然受ける悲しい定めだと考えられた。しかし1958年，62年，70年とワールドカップに勝利していくにつれ，世界におけるブラジル国民の位置を再評価させ，人種的にも黒人に積極的な価値が付与されはじめた（ダ・マータ[1983], pp.269-271）。極度に階級的な社会であるブラジルでは，スポーツが匿名の大衆にとって唯一自己の自由な表現の可能性を提示する舞台となっている。

さて本稿では，インド系住民が民族を挙げて支援し，南太平洋諸国内では常に優勝しているサッカーを取り上げる。公の場でハンディを背負わされている移民社会が自らの民族的な表現のひとつの重要な舞台としていかにサッカーを考えているか，そして植民地体制下でフィジーに移民し永住したインド人労働者の子孫が，サッカーというスポーツを通していかに民族としてのアイデンティティを確認しているかを検討する。

第1節　フィジーのスポーツ

フィジーのスポーツ界は，同じ英国植民地で先輩格のオーストラリアやニュージーランドの影響下で発展してきた。特にクリケット，ラグビー，サッカーなどは両国への遠征をきっかけに発展し，さまざまな国際大会にも参加するようになり，強化されてきた。

植民地支配が始まった1874年にすでに当時の首都のレヴカに英国人によるレヴカ・クリケット・クラブが誕生している（Snow [1949], p.3)。その後英国人の指導の下にフィジー人首長たちがクリケットを始め，各地で盛んになった。また女性のネットボールは，国際試合に代表を送っている。ホッケーも小学校の女生徒やフィジー系の女性がよく練習している。南太平洋を代表する世界的なスポーツはラグビーである。記録によれば1884年頃ヨーロッパ人兵士とフィジー人兵士の間で最初に試合が行われ（Fiji Rugby Union [1973], p.9)，第2次世界大戦後活発になった。今や南太平洋地域を制するものが世界のラグビーを制する。ここにはオーストラリア，ニュージーランド，西サモア，トンガ，そしてフィジーと強豪が揃っている。フィジーのラグビーはフィジー系民族だけでなく国を代表するスポーツである。1992年4月に香港で行われた7人制ラグビー競技大会「香港セヴンス」では，フィジー代表が3年連続チャンピオンになり，それを国家的な休日を設けて祝っている。15人制ラグビーは第1回ワールドカップでベスト8にまでいった実績をもつが，1991年の第2回大会では本戦にも出場できず，ラグビー・ユニオンの強化制度の不備が問われている。またラインアウトやスクラムを省略したスピーディな13人制のプロのラグビー・リーグが，ラムブカ首相を会長に据えて近年発足した。そこに優秀な選手を引き抜かれ，従来の15人制のラグビー・ユニオンは揺れ始めている。

先にも述べたように植民地政策に由来する民族問題が現代のスポーツのあり方や運営方法にも大きな影響を与えている。クリケットやラグビーのよう

に西欧主導型の競技団体運営から独立後フィジー系役員に運営が譲渡されてきたスポーツと，当初からインド系住民が運営の主導権を握っていたサッカー協会とでは運営方法に大きな違いが生じている。その違いは，植民地下の困難で不安定な状況のなかで何とか生き延び現在フィジー経済の主役を演じているインド系住民と，土地の所有権と政治的優位性を保証され生存のためのビジネス・マインドを育てずに済ませてこられたフィジー系住民との違いでもある。後述するようにフィジー系役員が運営するネットボール協会は累積する大きな赤字を毎年抱えている。そして1992年のプロのラグビー・リーグ発足は，従来のラグビー・ユニオンの役員がその役職を果たさず，国際試合を観光旅行の機会にしか考えていなかった現状に対する批判でもあった。

第2節　インド系住民のサッカー協会

1．フィジー・インディアン・フットボール・アソシエイション

1874年10月10日，当時フィジーを代表する13名の首長が英国に主権を移譲する条約に署名し，以後1970年まで英国の植民地体制下に入った。植民地政策のひとつとして，1879年から1916年まで5年間の契約労働者としてインド各地から6万553人のインド人が集められてフィジーにやってきた（橋本［1988］, p.2）。1984年度にはフィジーの人口の50%を，クーデター以後の89年には46.5%を占めているインド系住民は主にその契約労働者の子孫たちである。彼らはプランテーションでの5年の労働期間中は，「奴隷」と同じに扱われ，ラインといわれる掘っ立て小屋にカーストを無視して一緒に住まわされた（このカースト混合のおかげでインド人労働者のカースト制度が実質的に崩壊したと考えられている）。通常の体力では達成不可能なノルマを課せられ，できないと罰金を取られた。契約労働者には訴える権利は認められていたが，陳情所は遠く聞き入れられることもなく，労働者（coolie，クーリー）自ら法を執

行し，英国人監視人が伐採刀で切りつけられる事件が頻発していた（Sanadhya [1991], pp.41-45/Burton [1910], p.270/Kelly [1991], pp.31-40）。

インド人労働者は，５年の契約労働終了後も自由民としてさらに５年間フィジーでの在住が義務づけられていたが，以前のプランテーションに残る者はほとんどいず，自ら畑を借りて飢餓状態で収穫まで生き延び，１年後の収入でさらに畑を借り，耕作地を徐々に増やしていった。植民地政府の方針でインド人移民労働者は政治運動を禁じられ，全国的にまとまることがなかった。1920年１月15日になって初めて，インド人労働者の動きとしてスヴァとレワでストライキが起こった。それは生活改善闘争で，高い食費への不満を表明したものであった。1921年にはヴィティ・レヴ島北部のムバー地区，ラウトカ地区のインド人労働者によるストライキも起こった。これは1916年に最後の契約労働者がフィジーに上陸し，彼らが自由民となった年（21年）と呼応している。一方ではインド人労働者同士の連帯が生まれ，他方では彼らがもはや「クーリー」ではなく自由民になったとの社会的な認知も生まれた。

そのような背景で，1921年にインド人労働者が集まってサッカー・チームを作る兆しが生まれた。それまでは後にクリケットのところで述べるように，グランドもプレーをする時間も見つけ出すことが難しかった。1922年から５年間ほどは，スヴァのサンシャイン・サッカー・チームとレワのシタレ・ヒンド（Sitare Hind, インドの星の意）チームが定期的に試合をしていた（Naicker [1988]/Thatha [N.D.]）。スヴァではメソディスト派の学校の運動場や，アルバート・パークで練習をしていた。メンバーはホテルのコックやウェイター，タクシーの運転手，役人たちであった。スヴァからナウソリ（レワの中心町）までは現在でも車で30分ほどかかり，当時は試合に行って帰ってくるだけで１日かかっていた。

1924年，スヴァ YMCA からインド人キリスト教徒の加入が拒否されたのを機会に「インディアン・リフォーム・リーグ」が，ニュージーランドの YMCA から派遣されたマクミランと近代的な精神をもつインド人によって創設された。政治的な色彩はなく，クリケットなどの組織されたスポーツを

奨励し，フィジーにいるすべての民族相互の連携を心がけた。初期のサッカー競技会にもこのリーグからチームを出していた。この開放性は先見的なものである。

1928年スコットランドの医師ビーティ(Beattie)は，レワとスヴァのチームの勝者に「ヴリッディ（Vriddhi）杯」を与えた。レワはこの優勝杯を3年続けて獲得し永久保持者になった。ビーティは『ヴリッディ』という新聞を毎週発行し，インド人コミュニティの状況改善に取り組み，インド人の関心事やキリスト教徒の立場からの宗教論争などを載せていた（Gillion [1977], p. 109)。1928年は，彼がインド人の法的擁護のためにインドのガンジーに法律家を送ってくれるように依頼し，それに応えて法律家S･B･パテルがフィジーに派遣された年であった（Gillion [1977], p.109)。

1930年代になるとフィジー南部地域サッカー協会ができ，その地域での優勝チームに，当時の総督フレッチャーが優勝杯を提供し「フレッチャー・カップ」争奪戦が行われた。また1931年にはA･S･フェアーブラザーが優勝杯を提供し「サリヴァンズ・フェアーブラザー・カップ」(Sullivan's Farebrother Cup)というトーナメントも始まった。サッカーではないが，このフェアーブラザーは，1924年8月にラグビー・チームを最初の海外ツアーに連れて行き，サモアとトンガで初めてのテストマッチを組織した(Fiji Rugby Union [1973], pp.9,27)。また1939年に彼は，スヴァ・クリケット・クラブの代表者として，それまで民族別に組織されていたクリケット協会をひとつにまとめる努力をする（Snow [1949], p.124）など，フィジーのスポーツ界にとって大きな功労者に挙げられる。

1936年にヴィティ・レヴ島西部のラウトカにスヴァ・チームが訪れ試合をした。翌年スヴァにラウトカ･チームが返礼訪問を行った（Naicker [1988], p. 13)。これが現在まで続くビッグイベント「地区対抗競技大会」(Inter-District Football Competition)（フェアーブラザー・ロイド・トロフィー）が各地区代表の間で争われるきっかけになった。1938年にはスヴァのアルバート・パークで最初の地区対抗競技大会(IDC)が開かれ，レワが優勝した。またその年の

10月8日には，“Fiji Indian Football Association (FIFA)”が，フェアーブラザーを会長に，スヴァ，レヴカ，レワ，ラウトカ，ムバーの5地区が創始者になり発足した。その副会長の名前をみるとSingh, Khan, Deo, Patel, Charitraと皆インド系の名前が並ぶ。1938年の末までにナンディ，ナンロガ，ラキラキの3地区協会が加わった。翌1939年4月22日にFIFAの規約ができ，スヴァ以外の地域ラウトカで初めて第2回IDCが行われた。レヴカは代表を送れなかったが（*Fiji Times*. 11 Aug. 1939），レワがスヴァを破って優勝した（Naicker [1988], pp.13-14）。

2．統合の動き——競技団体名から「インディアン」の語が消えた年

当初の“Fiji Indian Football Association”が現在の“Fiji Football Association”とIndianの語を除外したのは1960年代初めであった。1961年か62年かで議論の分かれるところであるが，現在民族的対立が顕在化している状況下では，国民的統合の動きがスポーツの面で当時すでに始まっていたという事実は歴史的に重要な意義をもつ。この統合の動きはサッカーの国際化と大きな関連があった。サッカー・チームは1951年にアルバート・パークでニュージーランドと初めて国際試合を行い，4対6で負けた。1961年4月3日から5月末まで代表チームがオーストラリアに初めてのツアーを行い，外国チームとの実力の差を身にしみて感じた。1961年5月31日付けの『フィジー・タイムズ』紙は，オーストラリアのコーチが「フィジー・チームの主要な弱点は，選手が皆個人プレーをし，自分でスコアを狙うこと」であり，「自分が何をしているのか分からず，サッカーセンスが欠如している」とコメントしたことを紹介していた。またチームマネージャーのモハメド氏は，オーストラリアで最も科学的トレーニングで鍛えられた“フェデレイションXI”チームとの試合で，それぞれのポジションにふさわしい役割を果たし，チーム全体として総合力を発揮するポジショナル・プレーについて学んだ，とこのツアーの成果を語っていた。

現フィジー・フットボール・レフリー協会副会長ナイカー（Naicker）氏は，「フィジーのサッカー協会が世界サッカー連盟（FIFA）に加入するための準備として，国全体を代表する協会である必要が生じた。1962年8月4日から6日にラウトカで開催された『シルヴァー・ジュビリー（25周年）記念大会』でFFAとなることが決まった」と説明してくれた。しかし，1961年8月9日付けの『フィジー・タイムズ』紙は，「Indianという語が，“Fiji Indian Football Association”から消える。このように先の土曜日（5日）にナンディで開かれた協会の年次会議で決められた」と報道し，「アジア系以外も，サッカーの代表としてプレーできることを意味する」という注釈がついていた。先のナイカー氏にこの件について再度質問したところ，1961年にはトップだけの合意で，協会全体の総意を得たのが62年であるとの答を得た。しかし1973年“Fiji Independence Cup Tournament. Fiji Football Association Cup”（10月6日～8日）記念プログラム中の“Fiji Football Association...Its Composition and Activities”の記述には，「もとの名前はフィジー・インディアン・フットボール協会でもっぱらインド人のための組織だったが，実態は各地区でもナショナル・レベルでも，フィジー人や中国人を含んで地方の競技会に出ており，IDCにも参加していた。そのため協会は名称からインディアンの語を取ろうとした。その歴史的な日付は1961年8月5日土曜日，ナンディで開催された年次総会であった」とあり，さらに確認の必要がある。この日時の食い違いから，役員がこの改名にそれほど歴史的な意義を見いだしていない事情を窺うことができる。しかしこの改名は，当時インド人が置かれていた状況を好転させる契機となるものであった。また，特に1987年のクーデター以後のインド系住民が現在目指すべき「フィジーの国民統合」にとって重要な歴史的意義を見いだすべき事柄である。

当時の様子に詳しい終身会員のC・D・シャーマ氏は，「中国人も一緒にプレーしており，初めからインド人だけの協会ではなかった。インディアンの語を取ることは，アジア人以外の参加を認めることを意味していた」と説明してくれた。それ以後，フィジー人の参加が始まるのだが，ナショナル・チ

ームの7割をフィジー系選手が占めるという今日のような状況になるまでにはかなりの時間がかかった。1963年にスヴァで開かれた第1回サウス・パシフィック・ゲームズのサッカー代表には，中国系の名前やヨーロッパ系の名前はみられるが，フィジー系の名前は1名しか見あたらなかった。

3．民族的枠組みの撤廃——ラグビーとクリケットの場合

植民地体制下のフィジーでは日常レベルでは統治のために分離政策“divide et impera”が採られており，統治側のヨーロッパ人と先住のフィジー系住民，それに「移民」のインド系住民の宗教，職業，学校制度が別々になっていた（Gillion [1977], p.14）。そのためスポーツの競技団体も民族別に組織され，当初は一緒にプレーすることはなかった。まずクリケットが，次にサッカーがフィジーに住む全民族に開かれ，ラグビーが続いた。

クリケットはヨーロッパ人の指導の下で特にチーフ階級によって盛んに村落で行われ，早い機会に海外遠征も行われた。フィジーで最初のクリケット競技は，植民地になった年（1874年）に当時の首都レヴカで2月21日ヨーロッパ人によって早速行われた。その後は首長の庇護の下に各村落で活発に行われた。クリケットとインド人の関連をスノウの *Cricket in the Fiji Islands* から紹介すると，1949年にはインド人人口が10万人を超えていた。しかし彼らは当初は商売と農作業に全精力を注ぎ，クリケットに注意を払う余裕がなかった。さらに言えば，最初の契約労働者は年齢が比較的高く，スポーツマンではなく，文字が読めない農夫であったために，このようなゲームについての知識を得る余暇がない。フィジーで何年か過ごした後で初めてクリケットのようなゲームが存在していることを知った者も多い。ところが，息子たちの世代になると教育を受け，少しは豊かになり，余暇をもてるようになった。身体も体力も不足はしているが，クリケット人口は1930年代40年代と増えてきた（Snow [1949], p.103）。1939年になって，“European and Part-European Suva Cricket Club”と“Fijian and Indian United Cricket Associa-

tion”の2団体を統合する動きが起こった（Snow [1949], p.123）。この動きには反対もあったが，ユナイテッド・クリケット協会会長で陸軍中佐であるC・A・ブルースターやスヴァ・クリケット・クラブのA・S・フェアーブラザーなどの努力で，この植民地でクリケットがすべての人種を含んだ初めての競技になった。以後はほとんどのチームが全人種を含むことになった（Snow [1949], p.124）。

ラグビーが現在のような隆盛をみせたのは，第2次世界大戦終了後である。それ以前も行われてはいたが，国民的なスポーツとは言えなかった。最初の試合は，1884年頃ムバー地区でヨーロッパとフィジーの兵士がサーストン少佐の下で行った。当時はクリケット人口がいちばん多く，次がサッカーであった。1931年には首都スヴァ近辺の主にヨーロッパ人中心のクラブが集まって，“Fiji Rugby Football Union (FRFU)”が発足した。その一方で，1914年には「先住民の競技会」がエペリ・ガニラウ（初代フィジー共和国大統領の父親）の指導下で始まった。1915年にフィジー人主体の“Fiji Native Rugby Union (FNRU)”が発足した。1945年にはFNRUは発展的に消滅しFRFUとなった。そして1963年に現在の“Fiji Rugby Union (FRU)”に変更した（Fiji Rugby Union [1973], p.9）。会長は1970年まではヨーロッパ人が務め，71年からはペナイヤ・ガニラウ（初代共和国大統領）が会長をしばらく務め，以後は初代首相で第2代共和国大統領のカミセセ・マラが務めている。

第3節　サッカー協会（インド系）とフィジー系選手

1. 協会組織

1992年度の協会役員名簿をみると，会長のDr.サフカーンをはじめとして12名の役員全員がインド系住民である。1938年に発足した“Fiji Football Association”では，会長フェアーブラザーと書記／会計の2名を除いては皆

インド人であり，協会に所属する各地区の会長が全員副会長になっていた。

1992年現在所属するチームは全国レベルではプレミア部門（1部リーグ，10チーム）とセニア部門（2部リーグ，10チーム）とに分かれている。この部門の選手は各地区の代表で，地区のクラブなどから選出される。プレミア・リーグには西部地域のムバー，ナンディ，タヴア，ラウトカ，ナンロガの5チーム，南部地域のレワ，ナシヌ，スヴァ，ナヴアの4チーム，北部地域(ヴァヌア・レヴ島）のラムバサの1チームが所属している。毎年最下位チームとセニアの優勝チームが入れ替え戦を行う。セニア部門には，西部地域ではラキラキとナレワの2チーム，南部地域ではレヴカ，タイレヴ／ナイタシリ，タイレヴ／ノースの3チーム，北部地域ではサヴサヴ，セアンガンガ，ムブア，ナンドンゴ，タヴェウニの5チームが所属し各地域の勝者がプレー・オフを行う。1990年には西部地域にヴァトゥコウラ，南部地域にラミの名前がみられたが，91年からはみられなくなっている。

ユース・チームの育成もプレミア部門に入っている主要地区チームでは計画的に行われ，協会は南部地域でスヴァ，ナシヌ，ナヴア，レワ，タイレヴ／ナイタシリの5チーム，西部地域でラウトカ，ムバー，ナンディ，ナンロガ，タヴアの5チーム，北部地域でラムバサ，セアンガンガ，サヴサヴ，ムブアの4チームがそれぞれユース・リーグに参加している。西部と南部から各々3チームと北部の2チームが1カ所に集まって2日間の決勝戦を行っている。このなかからフィジーのユース代表を選び，「オセアニア・ユース・プレー・オフ」で外国チームと戦える力を養成することを急務にしている。

2．ナショナル・チームの構成——インド系選手とフィジー系選手

サッカー協会はインド系住民のものである。彼らが協会とサッカーという競技を育て，発展させてきた。しかしながら，グランドで活躍する選手をみると，ユースなどの底辺部ではインド系選手が圧倒的に多いものの，プレミア・リーグなどのトップレベルになると大半がフィジー系選手になっている。

1992年の調査では，特に20歳以下のフィジー・ユース代表チームに焦点を当てた。8月26日からタヒチで行われる「オセアニア・ゾーン・ワールド・ユース・プレー・オフ」（4カ国参加）のために第3次の最終キャンプが8月3日から3週間にわたって組まれた。4月の段階では47名，5月に27名，そして8月に22名がノミネートされた。この8月のキャンプには1日でも顔を出した者を含めると20名がキャンプに参加し，最終的には18名が残った。タヒチの大会ではニュージーランドとタヒチに敗れて2敗し，まだ国際レベルに達していないことが判明した。しかしこのメンバーが国を代表するベストメンバーとは言えない。ノミネートされてもキャンプに顔を出さない者も多く，結局コンスタントにキャンプに参加できる選手が最終選考まで残った。このことは一般のナショナル・チームにも言え，リーグには毎週出るが国の代表とはならない実力をもった選手が何人かいる。職場の理解が得られず休暇を取れないことや，また支援体制が整っていない地域ではフィジー系サッカー選手が国の代表に選出されても，ラグビー選手のように有名になるわけでもなく栄誉にもならないことなどがその理由と考えられる。

ユース代表選出では，地域間の実力の相違が極端に反映されていた。8月13日の最終選考では，西部地域からムバー地区7名（インド系1名，フィジー系5名，インド系とフィジー系住民の混血1名），ラウトカ地区5名（インド系4名，パート・ヨーロピアン系1名），他にタヴア地区のパート・ヨーロピアン系1名，ナンディ地区のフィジー系1名の計14名，南部地域からナヴア地区のインド系1名，そして北部地域からサヴサヴ地区のフィジー系1名とラムバサ地区のフィジー系2名の計3名，総勢18名の名前が発表された。このチームのインド系，フィジー系，その他の民族的な構成は6：9：3となっていた。彼らは各地区の主要メンバーであり，帰国後，9月25日と26日に行われたユースの全国大会ではユース代表のメンバー全員が再び出会った。ムバー地区（優勝）とラムバサ地区（3位）が同じプールAの第1戦で当たり，フィジー系選手の多い優勝候補同士が星のつぶし合いをした。チームの民族別構成でフィジー系選手が多いチームが上位を占めた。ちなみにインド系，フィ

ジー系，その他の順で上位4チームをみると，ムバー地区は2：8：1，スヴァ地区は9：2：0，ラウトカ地区は9：2：0，ラムバサ地区は0：11：0という割合だった。

インド系選手とフィジー系選手の違いをユースのナショナルコーチであるフサイン氏に聞いた。彼は，「フィジー系社会では子供が自由に育てられ，思い切ったことを自分からトライする精神がある。インド系社会では子供時代の躾が厳しく，大声を出すことがない」とまず幼年時代の躾の相違を指摘した。ユース選手を見ていると確かに球を呼び込む声，指示を出す声はフィジー系選手のほうが圧倒的に多い。一般のナショナル級の選手になると，インド系選手も大きな声で指示を出している。傾向として，フィジー系選手は接触プレーに強いが，自分の思い込みで勝負することが多い。インド系選手は体力はないが，ヘッドアップして有効なところに配球する。うまくなるにしたがってフィジー系は周りがよく見えるようになり，インド系はより冒険的になり，代表に選ばれるレベルに達する。しかし運動能力の差は歴然としており，フィジー系選手が代表には多くなる。フィジー系では小さな選手もいるが，インド系選手では体格がよい者しか選ばれない。

練習のパートナーや，合宿所で自分の寝床の隣に誰を選ぶか，といった点では同じ民族の選手同士が集まる傾向があった。合宿所はアルバート・パークのすぐ上にあるサッカー協会事務所に併設されており，入口にインド系の2人のコーチ，その隣にフィジー系選手が2人寝床を据え，次にインド系選手が3人といった順序で並んで寝ていた。両者1人ずつのペアはみられなかった。さらに詳しくみていると，同じ民族系のプレーヤー同士というよりもむしろ同じ出身チームの仲間同士でいることが多く，皆英語，フィジー語，ヒンディ語の3言語を話し，冗談もその範囲でやりとりされていた。それが観察者には最初は同じ民族系のプレーヤー同士の親密さとして映った。

8月18日の夜に，事務所でスポンサーからユース・チームに送られたTシャツやバッグなどのプレゼンテーションが行われた。そこにはタヒチへ行くチーム全員と2人のコーチ，マネージャーなどが参加し，見送る側の代表で

あるユース・チーム会長のC・D・シャーマ氏が興味深い言葉を贈った。まず「インド系選手とフィジー系選手がそれぞれ別々に固まっていた。それではいけない。君たちはひとつのチームである」。そしてフィジー語とヒンディ語で「共に生活し，共に食べ，共に勝つのだ」と結束を協調した。他の注意としては，「タヒチはハワイと同じパラダイスだ。そこにはたくさんのホリディ客がいる。しかし君たちは，ミッション（使命）をもっている。10日間の戦いの後の2日ならホリディでもよいが，10日間はしっかりやれ。……君たちは国の代表だ。“Don't sell you cheap” 自分を安く売ってはならない。君たちのジャージを買おうと言う者がいるが，決して売ってはならない。それは自分を安く売ることだ。また水着の女性たちに眼を奪われてはならない」などと国を代表する者の心構えを，予想される誘惑への注意を込めて語った。選手のディシプリン欠如が，特に一般のナショナル・チームではいつも大きな問題となっており，ユースにも注意を促した。

サッカー協会の関係者および選手は英語を中心に使い，フィジー語とヒンディ語を適宜織り混ぜて使用している。インド系の選手同士の会話に加わるときには，フィジー系のチームメイトはヒンディ語を話す。フィジー系選手同士ではフィジー語で，そこにインド系選手がフィジー語で加わる。東部のフィジー人村落では，大人も子供もヒンディ語をほとんどが話せないが，ユースのフィジー系選手は全員が話せた。シャーマ氏のチームワークに関する指摘は一般的には妥当でも，このチームの場合にはもはや当てはまらなくなっていた。彼は忙しい材木会社社長という仕事の合間に時折協会事務所に顔を出すだけで，練習を見たわけではなかった。彼が懸念するまでもなく，チームメイト同士の関係はかなり親密になってきており，パスワーク，バックスのオーバーラップ後の他のポジションの選手によるカバーリングなど選手間のコミュニケーションに問題はなかった。

(1)　コーチと選手

インド系コーチとフィジー系選手の関係にも注意が必要である。フィジー

人村落では若者は年長者に口答えしない。しかし年長者ではあってもインド系のコーチの指示をすぐには聞かぬフィジー系選手を何人か見かけた。一方，インド系選手の場合は，指示とそれに対する反応がスムースにいっていた。なかにはインド系コーチの指示でも素直に話しを聞いてできるだけ吸収しようとするフィジー系選手もいたが，指示命令系統が民族の枠を越えてはスムースに働かないことが指摘できる。

サッカーのナショナルコーチは，よく「コーチの存在」の必要性を新聞に訴えていた。彼はメディアを積極的に使って，選手が自分の指示をないがしろにして勝手な振る舞いが目立ったときには新聞を通して選手に語りかける。たとえば1992年８月17日の新聞には，メラネシアン・カップの優勝後，ワールドカップのオセアニア予選の準備のためにオーストラリアのチーム“メルボルン・クロアチア”を呼んだ。コーチのビリー・シン氏は，「自分が経営している会社の仕事のためにコーチに専念できない」と協会に申し入れ，ベテランで選手の信任も篤いインド系のマナーン選手を兼任コーチに任命してもらった。しかしシン氏は，「選手に規律を守り，チームのために専心する気持ちがみられない」ことが主な理由であると新聞に語った。「彼らはもうコーチ無しでもやっていけると考えている。だから今日（８月15日）負けたことは幸運であり，彼らはいかにコーチが必要か分かったと思う」と述べ，彼が敵と戦う前に自分のチームと戦っている様子がよく分かる。

彼のこのような懸念はひとつには彼自身に問題があるように思える。ナショナル・チームのキャンプで，彼は何か新しい技術や戦術を選手に教育し徹底しようとしているわけではなく，今までの体調の維持とチームワークの形成だけが目標になっていた。それが彼のコーチとしての限界でもあった。しかし別の局面では彼の存在価値は充分にあった。彼がいないとき先の新コーチのマナーン選手はチームメイトから「おまえがコーチだから指示をしろ」と言われ，結局選んだ練習がミニ試合であり，その試合で何をテーマにするのかの指示はなかった。いい加減な練習をしているところにシン・コーチが顔を出し，休んでいた選手やフルスピードで走らない選手を叱責すると，全

▲ユースチームのフリーキックの守備練習

員の動きが急によくなった。そして新聞に取り上げられたひとつの事件に対して，練習後すぐに対応した。新聞は，「ワールドカップ・オセアニア・ゾーンの予選に備える合宿所としてナウソリ競技場の中の建物が指定されたが，何の用意もなく，蚊帳も食事の準備もされていなかった。怒った選手2名がそこを出て家に帰った」（*Fiji Times*. 9 Sept. 1992, p.40）とレポートしていた。その後合宿所をスヴァに移した。スヴァでの練習後，彼は「こちらには専任のコックがいる。彼に食べたいものを何でも注文しろ。何でも作ってもらえるように手配してある」と選手を安心させた。

彼は自分が経営している会社名をつけたサッカーチーム "BA Motors" のオーナーでもある。選手にはナショナル・チーム代表が何人か入っており，金曜日の夕方にはソーシャル・ゲームを行っている。サッカーの世界でも，ラグビーの世界と同様に，役職やコーチへの就任が政治的に取り引きされていると言われている。後に検討するが，役職に就くことがインド系住民社会においてどのような意味があるのか明確にしなければならない。

(2)　規律

規律と専心の欠如も大きな問題である。これはインド系のコーチや役員が

民族・文化の枠組みを越えてフィジー系選手を掌握する難しさをも物語っている。役員が仕事をせず，海外遠征を観光旅行と勘違いしているという批判は聞くことがあるが，フィジー系コーチがフィジー系選手を指導しているラグビーの場合には，コーチの指示を選手が守らないという話は聞かれない。しかし，サッカーの場合には多く，シン・コーチは1991年8月21日の新聞紙上で海外ツアーでの規律違反の問題を「カイ・ゾロ」(Kai Colo) 現象という名で説明している。カイ・ゾロ（山奥のゾロ地区に住む人々）が都市に出てきたときのように，フィジーの代表選手は両民族とも先進国のテレビやナイトスポットの前で自制を失ってしまう。年次報告書や会報 “Fiji FA Soccer News Letter” には，罰金の理由，規律違反(キャンプからの無断脱出，ホテルの火災事件，審判への反抗・雑言など)，イエローカードおよびレッドカードの報告が載っている。シン・コーチが「カイ・ゾロ」現象と嘆いた事件は，1991年度の年次報告書のなかでその様子を知ることができる。この年のメラネシアン・カップはニューカレドニアで行われ，そこでのナショナル・チームの所行が12件の規律違反として報告されている。ホテルで失火騒ぎを起こした3名とキャンプでの規律違反で9名が100ドルから300ドルの罰金と，3年から5年のナショナル・チームへの出場停止が科せられた。この処分にもかかわらず，1992年のヴァヌアツで行われたメラネシアン・カップには上記の違反者が皆出場し，優勝している。選手に罰金を払う資金的余裕はない。皆チームが肩代わりして支払っている。彼らが必要であれば，チームが罰金を払って出場させる。結局，この種の罰は選手を対象にしながらも，全国的な組織であるフィジー・サッカー協会 (FFA) が地区協会から罰金を吸い上げる問題にすり替わっている。他にもリーグ戦の期間中に行われた違反行為も含めて63件が報告されていた。違反に対する罰金の支払が選手個人には科せられないので，規律の真の徹底は望めない。この種の罰金はラグビー連盟にはみられない。英国のフットボール協会の当初の規則では罰金を科せられたこともあった（中村・布施 [1981], p.76）が，現在のフィジーでは，アマチュア選手に罰金を科することに違和感を覚える。しかし，そこにかえってサッカー協

会を「ビジネス」感覚で「経営」しているスタッフの意識がみられる。

3．チーム構成と地区の特徴——都市と砂糖黍栽培地域

都市地域ではインド系選手が多く，砂糖黍栽培地域ではフィジー系選手が多い。これは決して都市ではインド系選手が優秀であり，砂糖黍栽培地域ではフィジー系選手が優秀であることを示しているわけではない。リクルート体制の違いである。フィジー系住民の体力と運動能力は一般にインド系住民を凌ぎ，フィジー系住民は遅れてサッカーを始めてもレギュラーのポジションを取ることが多い。最近は皆スクール・サッカーを経験しており，きっかけさえあれば本格的に始めることは難しい問題ではない。会社に勤めてから周囲のインド系の同僚と一緒にクラブ・チームでサッカーを始める例が多い。

ユースのナショナル・チーム代表の民族別構成比はすでに述べた。一般の1部リーグになるとさらにフィジー系選手の活躍が多くなる。1部リーグ10チームのうち，毎試合3点から1点まで両チームを合わせて3人の選手にポイントを与え，リーグ終了後に表彰するという企画をフィジー・タイムズ紙がしている。9月初めまで各チーム2試合を残す段階で83名がリストアップされていた。そのうちフィジー系選手は61名（73.5%），インド系17名，パート・ヨーロピアンおよび外国籍の選手が5名であった。また8月28日に発表されたナショナル・チーム23名の陣容をみると，フィジー系17名（73.9%），インド系5名，パート・ヨーロピアン1名であった。1部リーグでの各民族系の選手の活躍がそのままナショナル・チームに反映していると考えることができる。

ユースの地区代表チームは，特に各地区の両民族の状況をチーム構成に反映している。ユース・チームの構成の割合をみると，日常生活で両住民の親密な関係が想定されるところではフィジー系選手が多い。砂糖黍栽培地域であるフィジー西部と北部は，民族の枠を越えて家族同士が共に食事をとる機会をもつ地域である。インド系住民がフィジー系住民から土地を借り，イン

ド系住民から耕作機械をフィジー系住民が借りるという関係のなかで親密な関係が育まれている。また，1987年に誕生し，すぐにクーデターによって倒された労働党／国民連邦党連立政権の支持者としてもこれらの地域の住民は重要な役割を果たした。特に西部地域では，それまでの東部地域偏重，同盟党中心のラトゥ・マラ政権に対する反対勢力が両住民の間に浸透していた。それらの砂糖黍栽培地域とは異なり，スヴァやラウトカのような都市では，両住民間の関係は仕事場だけのつきあいが多くなり，両者の統合の割合が前者に比べると少なく，地区代表のユース・チームの構成をみるとインド系選手がほとんどとなる。

日常的に両者の統合が進んでいるところでは，インド系コーチがフィジー系選手をリクルートでき，フィジー系選手が多くなる。ムバー地区のように両住民ともに砂糖黍栽培にかかわり，日常的にも親密な関係が成立しているところでは，フィジー系が8名，インド系が2名，それに両者の混血が1名という割合になり，地区の両民族系住民から共に支援を受けている。またラムバサ・チームはコーチ以外全員がフィジー系であった。それに対し首都スヴァのユース・チームでは逆にフィジー系が2名，インド系が9名，またフィジー第2の都市ラウトカのチームでもフィジー系2名，インド系9名といった構成であった。チーム構成の違いはチームカラーの違いになる。フィジー系が多いチームは，思い切ったプレーや強い当たり，それにスピードが速い。インド系選手の多いチームは接触を好まずパスをつなぐが体力的に劣り，フィジー系選手の多いチームに勝つことは難しい。

フィジーの2大都市スヴァとラウトカのユース・チームは圧倒的にインド系選手が多かったが，プレミア・チームになると同じ地区でも逆にフィジー系選手の数が圧倒的に多くなる。出場者は毎回変わるが，リーグも最後の9月26日の試合では，スヴァはインド系，フィジー系，その他の割合が1：9：1，ラウトカでも4：6：1とフィジー系選手が多い（*Fiji Times*. 28 Sep. 1992)。ユースとプレミアとの構成比の違いは，ユースはセカンダリー・スクールから選手を選び，プレミアはクラブ・チームから選手を選ぶために生じ

る。先の審判協会副会長のナイカー氏は，「フィジー系選手は学校時代はラグビーをしていたが，就職をインド系の会社にし，そのサッカーチームに入ってくる。サッカーは金があり，仕事があり，旅行も多いので彼らは喜んでいる。サッカーには技術が必要だが，フィジー系住民にはフィットしている」と，プレミア・チームになってフィジー系選手が多くなる理由を，サッカーを支援するインド系企業やサッカー協会の豊かさにあると説明した。

各地区のサッカー協会およびナショナル・チームは，フィジー系の運動能力の高い選手を採用している。選手にはこのように道を開いているが，協会の役員やコーチにはフィジー系住民はいない。その理由としては，フィジー系住民のサッカーの歴史が浅く，役員になるような年齢の人物がまだいないことが考えられる。しかしもっと大きな問題は，協会運営にインド系役員や住民が抱いている理念にある。特に，インド系住民が協会運営をいかにビジネスとして「経営」しているのか，そのビジネス意識を中心に次節で探ってみたい。

第4節　インド系役員による協会「経営」

先にインド系住民が商業活動の中心になっていると述べた。サッカー協会の運営をみると，インド系役員たちは協会をビジネスとして「経営」しようとしている様子が窺える。フィジー系住民が運営するラグビー・ユニオンが考えつかないような，自前の競技場の確保計画や，より多くのスポンサーの確保のためのイベントを積極的に推進している。協会運営をビジネスと考えるため，商品である「試合」の楽しみを増し，質の高い競技者を確保することを第一の課題とし，インド系選手の数的な劣勢をそれほど深刻には考えていないところがある。ユース・レベルの競技人口は圧倒的にインド系が多い。しかし運動能力や肉体的な強さから，1部リーグの選手や国の代表になるとフィジー系が圧倒的に多くなることは前にも述べた。サッカー協会は，単純

なインド系民族主義にこだわらず，むしろフィジー系選手を積極的に使い，協会の効率的な「経営」により重点を置く。上部の運営団体をよりよく「経営」するために，フィジー系選手を手段として使用しているという指摘も可能である。

1．イベントの企画——ビジネスとしてのサッカー

サッカー協会は，意図的にイベントを企画している。メインの10チームによるプレミア・リーグ，10月の全地区総当たりの“Inter-District Competition (IDC)”，6月にプレミア10チームによる“Battle of the Giants (BOG)”，そしてリーグ戦が始まる前の4月にプレミア10チームによる“Fiji Football Association Cup Tournament (Fiji FACT)”などを企画している。特に後の3者はサッカー協会の資金獲得のための意図が大きい。この資金を3人の事務職員と3人の専任コーチの給料6万ドル，協会独自のグランドの確保，国際試合へのナショナル・チーム派遣資金などに充てている。

そもそもBOGは資金獲得のために企画された歴史をもつ。1977年スヴァで行われたIDCが雨に見舞われ赤字になり，その損失補填のためにスヴァ協会は，翌78年1部リーグ参加チームに呼びかけてトーナメント大会を行った。結果は空前の大成功で，本部に借金を返したうえにスヴァ協会の建物も建てた[1]。翌年よりBOGは協会の正式日程に組み込まれた。また1991年からは“Fiji FACT”も開始された。これは特に一般や17歳以下，20歳以下のナショナル・チームが，オリンピック，ワールドカップ，ミニ・サウス・パシフィック・ゲーム，メラネシアン・カップなどの国際試合に出場するための資金獲得を目的にしている。1991年の年次報告では5年間に総額40万ドルが必要だと述べられている（FFA [1991], p.114)。

FFAの「経営」手腕はいたるところで発揮されている。1992年度は10チーム総当たりのリーグ戦を行ったが，次年度は3ゾーンに分け，西部，南部，北部の各ゾーンからそれぞれ2，2，1の5チームを集めてプレー・オフを

行うことに決まった。現スポンサーのコカコーラ社は，賞金総額9000ドル，ユニフォーム代1280ドルなどを出し，3年間で総額10万ドルを提供している（FFA [1991], p.134)。しかしナイカー氏によれば，ゾーンごとに優勝賞金を募り，全国大会でもスポンサーを募ればさらに金が集まるという。このような「金を集める」経営手段が協会トップの間では検討されている。

1987年のクーデター以前はラグビーが土曜日に，サッカーが日曜日に試合をしていたためグランドに余裕があった。しかし日曜禁足令（Sunday Ban）以来，土曜日にあらゆるスポーツの試合が集中しグランドの確保が難しくなった。そのうえグランド使用料を市は入場料の約20%も取っている。1991年の年次報告書では以下のような数字をあげている。

1989	BOG	Nausori Town Council	$15,239
1989	IDC	Lautoka City Council	$24,534
1990	BOG	Ba Town Council	$19,669
1990	IDC	Nausori Town Council	$21,040
1991	Fiji FACT	Ba Town Council	$15,153
1991	BOG	Nausori Town Council	$23,108
			$118,743

これだけの金額がわずか4～5日のグランド使用料として取られるのは納得がいかないと考えている。施設の使用料は，売上に応じて決められる。ナショナル・スタジアムで入場料を取る場合は，売上が最初の2000ドルまではその25%，次の2000ドルでは20%，その次からは15%の使用料を取ることになっている。その取られた結果が上の数字である。そこで協会は自分のグランドを確保しようと考えた。協会専任事務局員のシン氏によれば，1990年よりIDCとBOGの入場料の20%をグランド獲得のために貯金し，すでにナンディに土地を確保しているとのことであった。このような計画を練り，それをさらに実行に移すだけの経営手腕は，フィジー系役員が運営する競技団体にはみられない。

〈フィジー系の競技団体の運営－ラグビー・ユニオンとネットボール協会〉

サッカー協会に比較するとフィジー系住民によって運営されているラグビー・ユニオンおよびネットボール協会は，「経営」としては成り立っていないといえる。たとえば，1992年9月23日付け『フィジー・タイムズ』紙によると，「ラグビー・ユニオンは約5万ドルで事務所を，会議室，屋内練習場や貸し事務所に改築しようと計画している。建物は古く毎年3000ドル以上の修理費がかかる。そこで改築が必要だが，『資金がない』ために工事に着手できない。どこかの企業がこの改築計画を援助してくれることを期待する。これはあくまでも計画である。資金がないのでしばらく延びる可能性がある。もし改築ができたら，4部屋を貸してその賃貸料を改築費に充てるつもりである。また資金として，スコットランドと南アフリカの代表チームがオセアニアのツアーのなかでフィジーにおいても2試合する予定なので，その入場料を充てるつもりである。そのツアーが取り止めになっても，ニュージーランドからマオリ・チームが来る予定であるから，資金は何とかなるだろう」と述べている。

フィジー系の女性中心のフィジー・ネットボール協会（FNA）は，4万5296ドルの借金を抱えている（*Fiji Times*. 27 Aug. 1992）。1987年にスコットランドのワールドカップに参加したときに1万6592ドルをスコットランドの協会が立て替えてくれたが，その4分の3が未返済である。施設使用料2000ドルの借金もある。そしてさらにネットボール21歳以下チームの前コーチに1万ドルの未返済分がある。前コーチはFNAが企画した資金調達宝くじに当たり1万ドルを獲得した。その賞金をオーストラリアで開催されたワールド・ユースカップに参加するために用立てたが，まだ返してもらっていない。また協会会長は，外部からの個人的借金を協会運営に充てている。その総額は1万3444ドルにのぼるという。

以上の両組織は，すべてフィジー系役員によって運営されている。その経済的センスは典型的なフィジー系住民の特徴を示している。入るかもしれない資金を当てにして，年来必要性を感じてはいたが具体的には計画が進んで

いない事業に手をつけようと思いつく。「資金無し」という記者会見もフィジー系住民らしい経営感覚である。ラグビーは競技場を囲い込んでおり，入場料を当てにできるだけ資金的な可能性が考えられるが，ネットボールの場合は絶望的である。何か事業を進めるたびに赤字が増える。それを誰かが立て替え，そこにしわ寄せがいく。赤字体質の改善の見込みはない。ここにインド系住民が「経営」するサッカー協会との違いが歴然としてくる。

2．インド系役員の協会「経営」とバラ・アドミの観念

最後に，サッカー協会の「経営」について述べて本論を終えよう。年次報告書および各種の競技会の記念パンフレットの冒頭には，必ず協会運営のために余暇を犠牲にして貢献している役員への感謝の言葉がみられる。しかし関心が薄らぐにつれて，貢献度も減少してくることがある（FFA [1991], p.5）との嘆きも述べられている。インド系役員は専任の3名を除いてすべてボランティアで役職をこなす。そして休日に自費で試合に駆けつけるインド系審判たちを見ていると，通常他民族から「金に汚い」と言われているインド系住民が，なぜサッカー協会に引き付けられるのかその理由を探る必要を感じる。

契約労働から解放され，やっと落ち着いた1921年頃からインド系住民にとってコミュニティの集まりなどで主要な役割を果たし始めたバラ・アドミ（bara admi, ビッグマン）の存在に思いを馳せぬわけにはいかない。インド系住民の間では金銭やサービスの貸し借りの緊密なネットワークが特に重視されている。カースト制が崩壊しているフィジーのインド系住民社会にとって「アウト・カースト」とは，この関係のなかでの経済的・社会的なボイコットを指す。彼らは金を貸借し，大いに活用して裕福になり，そして「ビッグ」になることができる。しかしそれはあくまでもこのようなネットワークの存在を前提にして初めて可能なことである。それゆえ「ビッグ」であろうとするものは，この社会の全体的な活動を支援し，必要なあらゆる贈り物，会合での食物や食糧などを提供する（Kelly [1988], p.385）。

協会のインド系役員の行動は，上に述べた「ビッグマン」としての行動パターンと，フィジーのインド系社会で成功した人々の「ビジネス・マインド」が見事に融合した姿であるといえる。協会事務局長が1991年10月のIDCの記念パンフレットで「サッカーは我々のビジネスである。それを真剣に考えよう」(Maharaj [1991], p.25) と述べている。「協会は6名の専任スタッフをおくことができた。彼らに年間6万ドルの経費がかかる。それに他の仕事にも10万ドルが必要である。我々の態度，考え方，管理・経営，チームのマネジメント，サッカーの強化策，競技会などの分野で今や“プロフェッショナリズム”が広範囲に必要である」と協会運営に「ビジネス・マインド」を必要とする背景を説明している。

そのひとつとしては，サッカーのマーケティングを，広告や広告主を通して魅力的に行うことが重要であると指摘している。「特に広告を通してスポンサーを集めることが重要である。メディアはせっかくスポンサーについてくれた企業に対して不親切である。トーナメントや競技会には意図的にその名前を冠しているのにメディアがオミットしている。他のスポーツでもオミットしているのなら文句を言わないが，サッカーだけがオミットされるのは納得できない。ペンの力でスポンサーを引き付ける協力をして欲しい。我々の方も，メディアのレポーターを尊重しなければならない。彼らとの間に信頼関係を作り上げ，外に向かった，建設的な情報を提供すべきである」(Maharaj [1991], pp.25-27) と関係者に注意を促している。これはインド系住民のビジネス・マインドに馴染んだ方針であり，それを半公的な団体に採用したところが他の競技団体より数歩進んでいる。

おわりに

最後に指摘しなければならぬ問題がある。初めに述べたように，現憲法下ではインド系住民はハンディを背負った第2クラスの市民である。しかしイ

ンド系の家庭に雇われるフィジー系のハウスガールは，洗濯や掃除だけで，決して料理を任されることはない。いわばインド系住民はフィジー系住民を「アウト・カースト」として自分たちより下位に位置づける意識がある。サッカー協会がより面白い試合を見せるために，体力と運動能力が優れているフィジー系選手の採用に躊躇をみせないのは，ひとつには彼らを「雇っている」という意識があるのではないかと思われる。アメリカの野球やアメリカン・フットボールでも，黒人や有色人種を採用しても，監督や団体役員は白人で，運営し楽しむのは白人だという意識がみられる（スコット[1976], p.241/ノバック[1979], pp.131-135）。しかしフィジーにおけるインド系住民の複雑な状況を考慮すると，「インド系住民の楽しみのためのフィジー系選手」といった単なる民族主義的な意識を指摘するだけでは充分ではない。インド系社会内部の価値観とフィジーという政治状況内での彼らの立場が，フィジー系選手の採用という現状を創出しているのである。サッカー協会は，インド系住民の「経営」マインドを刺激し多くのサポーターを集める，彼らにとって唯一精神的中心になりえるものだということができる。

〔注〕

(1) フィジー・サッカー協会発行の大会プログラム（FFA Battle of the Giants Souvenir Program 1992）p.13より。

〔参考文献〕

〈日本語文献〉

T・D・ジャキュース　&　G・R・パビア編著（大橋美勝訳）[1983],『スポーツの楽しさとは何か―オーストラリア人の生き方との関係から―』道和書院

ジャック・スコット（片岡暁夫訳）[1976],『現代スポーツへの警告』不味堂

ロベルト・ダ・マータ [1983],「社会の〈内なる〉スポーツ　国民劇・国民祭としてのフットボール」（山口昌男編『見せ物の人類学』三省堂）246-287ページ

中村敏雄・布施善克他［1981］,『スポーツナショナリズム』大修館
マイケル・ノバック（片岡暁夫訳・浅田隆夫校閲）［1979］,『スポーツ　その歓喜』不味堂
橋本和也［1988］,「第三世界における『民主主義』―フィジーのクーデターが提起したもの―」（『静岡県立短期大学部紀要』創刊号）1-16ページ

〈外国語文献〉

Burton, J.W. [1910], *The Fiji of To-Day.* London : Charles H. Kelly.
FFA (Fiji Football Association) [1991], *53rd Annual Report.*
Fiji Rugby Union [1973], *Rakavi 60 : 60 Years of History of the Fiji Rugby Union.*
Gillion, K.L. [1977], *The Fiji Indians : Challenge to European Dominance 1920-1946.* Canberra : Australian National University.
Howard, Michael [1991], *Fiji : Race and Politics in an Island State.* Vancouver : UBC Press.
Kelly, John Dunham [1988], "Bhakti and the Spirit of Capitalism in Fiji the Ontology of the Fiji Islands." Ph.D. dissertation, University of Chicago.
Kelly, John Dunham [1991], *A Politics of Virtue Hinduism, Sexuality, and Countercolonial Discourse in Fiji.* Chicago : University of Chicago Press.
Lal, Victor [1990], *Fiji Coups in Paradise : Race, Politics and Military Intervention.* London ; New Jersey : Zed Books Ltd.
Maharaj, J.D. [1991], "A Look at Fiji Soccer," *Fiji F.A. Presents 53rd I.D.C. 3-7 October 1991. Prince Charles Park, NANDI.* pp.21-29.
Naicker, H.R. [1988], "History of Soccer in Fiji," *F.F.A. Golden Jubilee.* pp. 13-22.
Naidu, Vijay [1980], *The Violence of Indenture in Fiji,* Fiji Monograph Series No.3. Suva : University of the South Pacific.
Sanadhya, Toraram [1991], *My Twenty-one Years in the Fiji Islands and the Story of the Haunted Line* (tr. & ed. by John Dunham Kelly & Uttra Kumari Singh). Suva : Fiji Museum.
Snow, D.A. [1949], *Cricket in the Fiji Islands.* New Zealand: Whitcombe & Tombs Ltd.
Thatha, Gabriel Joseph [N.D.], *Soccer Playing & Fitness through Rhythmic Exercises.* Suva.